

# 逆さ堀さかぼり

その昔、中里宿辺りに北に向かつて流れている堀がありました。この堀の工事は田畑の用水確保のためのもので、川は、鬼怒川から山田川に合流し、中里西部、免の内を流れ、逆面に達していました。

ところで、この辺りの堀は、北から南へと流れているのが常ですが、どうしたことか、この堀は逆に南から北に流れていたのです。人々は『逆さ堀』と呼んでいました。当時、この山間に水田拡張を計るために水路工事を着工しようとしたのですが、大変な難工事であったといわれ、なかなかはかどらなかつたのでした。

村人たちは、どうしたらよいのやら、何かよい方法はないものかと困っていました。村人たちは、

「ここに水路を引くことは、この辺りの山の神様がお許しになんねえんだんべよ。」と、ささやくようになったのです。





ある時、ととき 村内の長老の一人が、

「山の神に若い娘二人を人柱としてささげれば、工事がいいあんべえにえくんだとよ。」

と、神のお告げがあったのだといいました。早速村人たちは二人の若い娘を選ぶことに

なりましたが、名乗り出る者は誰一人としてなく、困り果ててしまったのです。

村内の長老は、悩みに悩んだ末、二人の我が孫娘をと考え、そのことを身を切られる

思いで、

「村内のみんなが困っちゃってんだ。何とかなんねえもんか、お前たち二人が、神のも

とに仕えてくれねえか。」

と、涙ながら二人の孫娘に頼んだのでした。

長老の家には三人の娘さんがおりましたが、長女と次女の二人が、爺ちゃんの困り果

てた様子を見て、

「爺ちゃん、わたしたち二人がえぐよ。」

爺ちゃんに気持ちを伝えたのです。

「すまねえな、ありがとうよ。」

長老は、二人の娘に頭を下げ、手をにぎりしめ涙したのでした。

やがて、このことを耳にした娘たちの両親は、

「なんちゆうこった。なんぼ村のためとはいえ、あまりにもひどすぎら。」



と、嘆き悲しみましたが、二人の娘の気持ちは、変わりませんでした。

長老は、鬼のような自分の心と孫娘のいじらしい気持ちに毎夜悩み続けたのです。

数日たった雨の降る日のこと、村人たちは、若い二人の娘の髪の毛を結び人柱として、

神に捧げ、工事の完成を祈ったのでした。しかし、工事は計画通りに事が進まず、難工

事であったといわれました。

このことがあってから、この辺りでは真夜中になるとどこからともなく、

「かあちゃん、かあちゃん、家さ、けえりてえよお。家さ………」

と、二人の娘のすすり泣きと母を呼ぶ声が聞こえたということなのです。

以来、村人たちはこの場所を「泣いだ原」と呼ぶようになり、いつしかこの言葉が訛

り、現在の「前田原」になったのだともいい伝えられています。

現在は、この堀は土地改良等により、当時の面影を見ることができませんが、『逆さ堀』

の名は語り伝えられており、「前田原」の名称は残っています。